書評、山本昌雄編著『虚構の軍神』
東京図書出版会2002年刊

渡辺　肇

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2002年8月16日　受理)

山本五十六元帥は東條英機大将に較べると悲劇の英雄として持て囃されて来た。但し、軍令家としては果たして一流の人物であったのか否か疑問を持たざるを得ない。圧倒的に優勢な兵力を擁しながらミッドウェイ海戦に敗北した事だけでも其れは明らかであろう。

1937（昭和12）年12月12日南京陥落の直前に日本の海軍航空隊が南京に近い揚子江上で米国の河川用砲艦パナイ号を撃沈した事件が発生した。日本の政府と軍部は米国の介入を恐れ対応に苦慮したのである。著者の山本昌雄氏は山本元帥が中将時代海軍次官としてパナイ号事件をどの様に処理したかを検証し山本元帥が軍政家としても誠実さに欠けた人物であり、山本元帥を軍神とするのは全くの虚構である事を論証しようとしている。

満州事変、支那事変を開始し大東亜戦争に導き日本を破滅させたのは陸軍であり海軍は最後まで平和を希求したのであって、その海軍の方針を履行すべく最後まで努力したのが、米内光政大将と山本元帥であったとする陸軍悪玉、海軍善玉説に陸士出身の現役将校であった著者が反駁しようとするのが本書の目的の様だ。

蘆溝橋事件から始まった北支那事変が上海に及び支那事変に拡大して行く過程の主導権は海軍が取って居りそれだけでも海軍善玉論はかなり怪しい事が分るが著者は山本海軍次官のパナイ号事件の処理が不正なものであった、つまり海軍が単独で起こし陸軍が関わっていなかったパナイ号事件を強引に陸軍が共犯であった如くに取繕ったのは真に邪悪な方策であった事を論証する事で陸軍の雪辱を計ったのである。

またパナイ号事件の責任者である支那方面艦隊司令長官長谷川清中将と第二聯合航空隊司令官三並貞三少将への処罰がなされなかった点を著者は批判している。信賞必罰無くしては軍の規律は保てないが海軍はミッドウエィ海戦敗北の際にも処罰は全く行っていない。陸軍は海軍に比較すれば或る程度は行なってはいる。南京占領の際の不祥事による中支那方面軍司令部の解体と松井石根司令官の召集解除、ノモンハン事件敗北による植田謙吉関東軍司令官の解任と予備役編入等である。しかし陸軍の処罰も十分では無かった。例えばノモンハン事件の実質的責任者の辻政信参謀には何の処分も無かった点などは軍紀の頽廃を招いた原因だと思われる。陸海軍とも官僚組織であり現代の官僚にも通じる無責任体制が存在していたのだ。

著者の論証には事実に反した勇み足の部分もある。著者がアメリカ公文書館から入手した関係文書の中での用語 War Office の訳語は陸軍省が常識であり、著者が主張する統合参謀本部的

なものを意味していないのは明らかである。当時の米国の組織でも War Secretary と言えば陸軍長官の事であり Navy Secretary と言えば海軍長官のことであった。従って当然 War Office は陸軍省、Navy Office は海軍省の意味であり山本昌雄氏のように解釈するのは無理である。日本の陸海軍の統帥部は陸軍の参謀本部（長は参謀総長）、海軍の軍令部（長は軍令部総長）と並列して居たが外国はそうではなかったと著者は主張するが、米国にしたところで陸軍参謀総長 Chief of General Staff と海軍作戦部長 Chief of Naval Operation は並列して大統領に直属していたのであり統合参謀本部が設置されたのは第２次大戦後の事である。

また著者は146ページに於いて問題としている文書のCopy of Memorandum from the Japanese Navy Office to the American Naval Attaché（日本国海軍省より大使館付米国海軍武官への覚書コピー）を意図的に訳していない。これはその上の行の Copy of Memorandum from the Japanese War Office to the American Military Attaché（日本国陸軍省より大使館付米国陸軍武官への覚書コピー）に対応する文書であり War Office を訳さない為 Navy Office まで訳さなかったのは恣意的に過ぎる。

また著者は200ページに於いて「爆撃機で有効な地上掃射ができるか？」と疑問を呈しているが、それは海軍の軍用機に関する無知から来ているのである。51ページでパナイ号を攻撃したのは「第12航空隊から95式艦上戦闘機９機と94式艦上爆撃機６機、第13航空隊から村田重治海軍大尉の率いる96式艦上攻撃機３機と、奥宮正武海軍大尉の率いる96式艦上爆撃機６機からなっていた。」と記載されている。艦上攻撃機とは水平爆撃ないしは魚雷攻撃用の３座機で鈍重であり機銃も後部座席に設置した自衛用の旋回機銃のみであるので著者の言う通りパナイ号に対し機銃掃射を行ったとは思えないが、艦上爆撃機とは急降下爆撃機のことであり防御砲火を発する敵に対しても突入するのが任務である。従って後部座席の旋回機銃の他に機首には前向きの固定機銃２挺を有しているのである。

だから機銃掃射を行うのは可能である。94ページで奥宮大尉が米内光政海軍大臣から「戦闘遂行間の不注意」の為に譴責処分を受けていると記載されているので機銃掃射を行ったのは奥宮氏の率いる艦爆６機であったと推定出来る。しかしながら現在も元気に活躍されている奥宮氏の戦後の言動等からしてパナイ号を米艦と認識した上で故意に攻撃したと解釈するのは困難であろう。

94ページで著者は「当時第12・13両飛行隊を指揮していた第２聯合航空隊司令官三並貞三海軍少将」「は事件3日後の15日に同職は免ぜられた。しかし対米通牒に明記された召還どころか19日付で呉港所在の第２航空艦隊司令官に補職されたのである。同艦隊は空母蒼龍を旗艦とする栄職である。海軍退役は実に昭和16年12月！」と記している。著者の気持は分るが歴史を記する以上は記述を正確にする必要がある。当時海軍の艦隊は陸軍の師団に当り指揮官は中将で司令長官と称し親補職であった。陸軍の旅団に当るのが戦隊であり指揮官は少将であり司令官と称した。また陸軍の聯隊にあたるのが軍艦（戦艦、空母、巡洋艦等であって駆逐艦、潜水艦等は軍艦ではなかった。）または駆逐隊、潜水隊、航空隊等の隊であった。軍艦の指揮官を艦

長（ちなみに例えば駆逐艦の指揮官は駆逐艦長であり艦長ではなかった。）と称し、隊の指揮官を司令と称し、大佐を充てた。日本で航空艦隊なる組織が出切るのは4年後であり当時はまだ無かった。従って第2航空艦隊ではなく第2航空戦隊である。第12・13飛行隊と言うのも第12・13航空隊である。また「同艦隊は・・・・・栄職である。」という文章は意味が通らない。推敲不足と言うしかない。また三並氏は退役したのではなく予備役に編入されたのであって表現が不正確である。60年前には常識であったこの様な事実を不正確に表現するのは歴史を正しく記録すべきとする著者にとっても恥辱だと思う。第2版を印刷するような事があれば是非訂正して欲しい。

老齢の著者が気概を持ってこの様な著書を著した事に対しては大いに敬意を表したいが歴史の通説に挑戦する為には事実関係をもっと正確に記述し推敲にもより多くの努力を払われん事を希望してこの書評を終えたい。

―終―

Masao Yamamoto, *Kyokou no Gunshin* (*A False War God*), 2002

Hajimu WATANABE
College of Liberal Arts and Science for International Studies
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received August 16, 2002)

Mr. Masao Yamamoto graduated from the military academy of the Imperial Japanese Army and was commissioned during the Second World War. After the war he joined the Japanese Ground Self Defence Force and was promoted to colonel. He now spends his retired life in the study of the history of warfare.

On December 12, 1937 Nanking, the capital of China at the time, was to be occupied by troops of the Imperial Japanese Army. Many civilians and Chinese soldiers attempted to escape from Nanking using ships and boats on the Yangtze. Among those ships was the U. S. S. Panay , a river gun boat of the U. S. Navy.

The U. S. S. Panay was found by airplanes of the Imperial Japanese Navy , bombed and sunk by them. This was the Panay incident. The Imperial Japanese Navy insisted that the attack had taken place because the Japanese pilots had mistakenly believed that the ship was a Chinese ship. However, the Americans were angered by this incident and alleged that the Japanese had done it intentionally.

Vice Admiral Isoroku Yamamoto, the Japanese Vice Minister of Navy, visited the U.S. Embassy in Tokyo on December 23, 1937 to see U.S. Ambassador Joseph. C. Grew and apologize to him for the incident. Ambassador Grew was satisfied with the apology made by Admiral Yamamoto and the matter was settled.

Colonel Yamamoto, the author, doubts whether Admiral Yamamoto was telling the truth in this visit. Although the Imperial Japanese Army, according to the author, was not at all involved in the attack against the U. S. S. Panay, Admiral Yamamoto explained to Ambassador Grew that the Imperial Japanese Army was involved as an accomplice. The author has another suspicion that the incident was planned by several officers of the Imperial Japanese Navy. Unfortunately there is not enough objective evidence for us to accept the author's hypothesis in regard to his second suspicion.

There is a legend that only the Imperial Japanese Army was responsible for the war that Japan suffered from and lost. According to this legend, the Imperial Japanese Navy, represented by Admiral Yamamoto, was a peaceable organization. Therefore Admiral Yamamoto is regarded to have been the tragic admiral. After serving as the Vice Minister of Navy, he was appointed Commander- in- Chief of the Japanese Grand Fleet . In spite of his wish not to fight against the American Navy he was forced to plan the attack on Pearl Harbor in 1941 and he planned the battle of Midway in 1942 with the serious loss

of four important aircraft carriers. He might have committed suicide to take responsibility for losing his war, by being shot down in his airplane as he was visiting the front in the Solomon Islands in 1943.

Colonel Yamamoto has tried to change this legend by showing that Admiral Yamamoto was not only a mediocre commandant but also a bureaucratic intriguer. It seems that Colonel Yamamoto has succeeded to some extent in analysing the nature of Admiral Yamamoto.